

クラウド戦略に データ戦略が必要な理由

データに適したプラットフォームがあつてこそ
クラウド戦略は成功します



目次

| | |
|------------------------------|---|
| クラウドに伴う新しい課題..... | 4 |
| 今こそデータを活用する..... | 6 |
| クラウド戦略のためのデータ戦略..... | 7 |
| 監視から可観測性へ..... | 8 |
| 適切なデータプラットフォームがデータ戦略を促進..... | 9 |

クラウドは変革を実現するために不可欠だが 複雑さが増す要因でもある

第1段階

保持と最適化

緊密に結合したアプリ、
導入開発サイクルの長期化



第2段階

リフトアンドシフト

主に使用するのは
クラウドIaaS



第3段階

リファクタリング

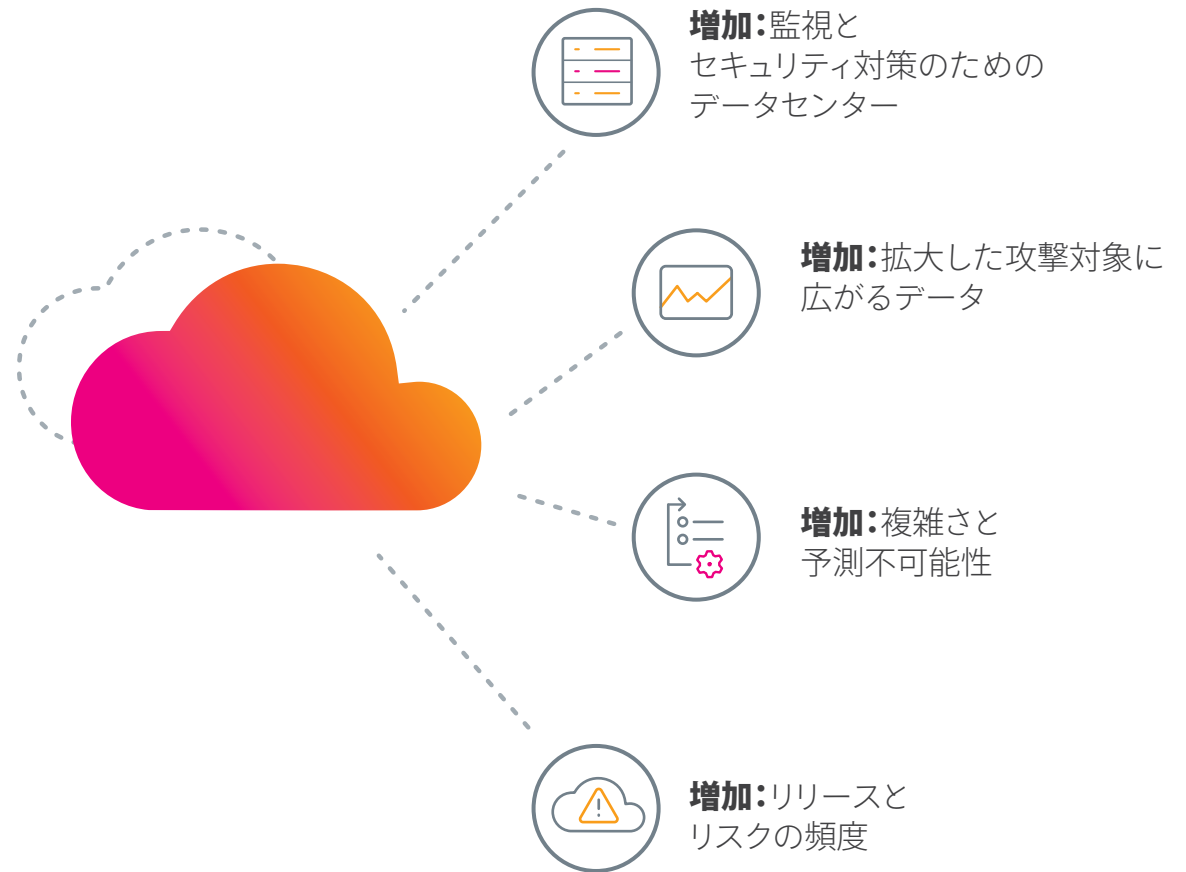
モジュール化が進んだが、
アプリコンポーネントは相互依存



第4段階

リアーキテクト

緩やかに結合した
マイクロサービスと
サーバーレス機能



クラウドに伴う新しい課題

あらゆる組織がクラウドへの移行を進めているか、既に導入しています。必要に迫られていると同時に、このテクノロジーを採用することでメリットを期待できるからです。当初、クラウド導入の原動力となっていたのはコストの削減でしたが、次第にデジタルネイティブの新興企業に淘汰されない競争力をつけることになっていきました。どのような組織もデジタル化を強いられており、クラウドによるインフラ、プラットフォーム、サービスに移行して変革を加速しています。ユーザーが求めるエクスペリエンスは、送金であればVenmo、小売店とのやりとりならAmazonのようなものです。この傾向は職場にも広がり、今や従業員もこうしたユーザーエクスペリエンスを期待しています。

リーダーは“デジタルトランスフォーメーション”がもはや単なる流行語ではなく企業の存続に不可欠であることを理解しています。デジタルトランスフォーメーションの重要性について経営幹部を説得する必要はありません。彼らは皆、より速く、より安全で、より効率的な変革を目指しています。

クラウドが生み出すチャンスによって、消費者の期待に応えられるようになるだけではありません。もちろんテクノロジーの面でもメリットを得られます。柔軟性に欠けるオンプレミスシステムに比べて、通常、SaaSアプリケーションは使いやすく設定が簡単です。クラウドサービスを拡張する場合は、自社で新しいハードウェアを購入して設定する場合よりもはるかにシンプルです。これらはすべて、コストの低減につながる可能性があります。これはクラウドで広範なサービスを利用できるからです。組織はそれらを利用する

クラウドの導入は一見シンプルなようで実は複雑さをもたらしていることにも注意する必要があります。

ことで、サイズやビジネス要件に関係なく、開発の時間を短縮し、自身のニーズに合わせてコストを調整できます。さらに、クラウドにサービスを移すことにより、組織は時間とリソースを内部のITシステムの管理に費やすのではなく、ビジネスの差別化と拡大につながるプロジェクトに投資することができます。

つまり、組織はクラウドにデジタルトランスフォーメーションの加速化を求めているのです。

クラウドのメリットを実現させるには、組織は以下の戦略を採用する必要があります。

- クラウドサービス自体に加えて、クラウドで実行中の重要なビジネスワークロードの健全性とパフォーマンスをリアルタイムで可視化する
- コストを管理することで、要求の拡大に対応しつつ経済的なメリットを実現する
- クラウドでの強力なセキュリティ体制を維持する
- 新しいクラウドネイティブのテクノロジーとベストプラクティスを確実に導入および運用化して変革を加速する

また、クラウドの導入は一見シンプルなようで実は複雑さをもたらしていることにも注意する必要があります。

クラウドの導入には時間がかかります。多くの組織では常に、トランスフォーメーションジャーニーの複数の段階が並行して進んでいる状態にあります。一部のアプリケーションやサービスはオンプレミスに残される一方で、リフトアンドシフト方式で大きな変更なくクラウドインフラに移行されるものもあります。ビジネスクリティカルアプリケーションの多くはクラウドを活用できるようリファクタリングされますが、クラウドネイティブとして全面的に作り直されるものもあります。複数の段階におよぶジャーニーの結果は、組織全体にわたりすべてのテクノロジーチームに影響します。

ITチームは既存のレガシーインフラに加え、マルチクラウド環境全体にわたって各種サービスを監視および管理しなければなりません。料金は従量制なので、管理を誤ればコストが跳ね上がることもあり得ます。また、システムが数多くなれば、相互依存関係が高まり潜在的な障害点も増えることになります。結果として、うまく対応できなかった場合には以前よりも大規模なダウンタイムが頻繁に発生することになります。既存のツールでは機能が不十分であり、可視性が限られているからです。

DevOpsチームは、開発者が呼び出しに待機する態勢で、相互に依存する数百から数千ものマイクロサービスを伴う、より複雑なアプリケーションを管理しています。継続的インテグレーションと継続的デリバリーではコード変更がほぼリアルタイムで発生するので、エラーが生じる可能性がこれまで以上に増えます。遅れでさえもダウンタイム並みのダメージとなる世界において、このことは重大な課題です。

セキュリティチームは、社内の完結した環境の状況を管理するだけでは不十分です。攻撃対象が拡大する中、より多くの場所やアプリケーション、デバイス間を行き来するデータの制御と可視化に努めなくてはなりません。

たとえば、Webサイトの開発、監視、セキュリティ対策の複雑化について考えてみましょう。かつて、情報提供を目的とする静的なWebサイトは、オンプレミス環境にデプロイされていました。監視は比較的簡単で、セキュリティリスクは管理が可能なものでした。遅延やCPU使用率など、追跡が必要な事項はどれも簡単に監視できました。Webの開発チームと運用チームの両方が、サイトの健全性を明確に理解していました。

消費者がeコマースや決済機能付きのモバイルアプリなどの新しいエクスペリエンスを求め始めると、Webサイトの開発とデプロイは根本から変化せざるを得ませんでした。多くの組織にとって初めてのクラウド移行は、こうした要求を満たすために役立ちました。季節変動への対応力が向上し、クラウドプロバイダー各社が提供する新しいサービスが役に立ったのです。顧客の満足度は上がりましたが、アプリを裏で支えるチームにとっては盲点が増えました。

組織の変革を助けてくれるはずのテクノロジージャーニーも、扱いを誤った途端に長期的な成功の妨げとなり、負担に変わってしまいます。

現在の顧客は、アプリまたはWebサイトで発注すれば確実に処理され、自宅への配送や店での受け取りを指定できるという、小売店とシームレスに連携したエクスペリエンスを期待しています。その結果、企業は自社のさまざまなシステムを、従来にはなかったかたちで連携させる必要に迫られました。開発者はサードパーティの決済処理機能やERPシステム、その他多くのものとの連携に頼るようになりました。

ほとんどの組織はエラスティッククラウドインフラを使って要求の急増に対処し、必要に応じてすばやくスケールアップまたはスケールダウンしています。しかし、クラウドがビジネスにおよぼす全般的な影響はさらに甚大なものです。潜在的な障害点や、収集した情報の機密性が飛躍的に増大しています。新しく発生したこのような複雑さへの対処は、圧倒される仕事です。

組織の変革を助けてくれるはずのテクノロジージャーニーも、扱いを誤るとすぐさま重荷となり、長期的な成功を妨げるものになります。幸いにして、クラウド主導の変革には不変の定理があり、これは同時に次の課題を打破するうえでの鍵でもあります。それは、現代の組織が生成および収集するデータは、量、種類、速度において過去を上回っているということです。

適切なデータプラットフォームを用意しておけば、クラウドに関連する現在と今後の取り組みを加速して成果を上げるためのデータ主導型戦略を策定できるのです。



今こそデータを活用する

この新しいData Age、データの時代において、組織は2種類に分かれることでしょう。1つは自らのデータを効果的に活用して、ビジネスの監視、セキュリティ対策、推進を行っていく組織です。もう1つは、もはや存在しない組織です。ESGとSplunkの共同調査によると、ビジネスへのデータ活用に積極的に取り組むデータイノベーターは、こうした取り組みを行わない組織に比べて利益成長率が12.5%高くなっています。

成功を実現することは、口で言うほどたやすいことではありません。組織内のクラウドとオンプレミスの両方にわたってすべてのテクノロジーを明確かつ包括的に把握することは、困難なものです。データは今や数多くのシステムとエンドポイントに分散しています。構造化や標準化は手薄になる一方で、データは次々と生成されていきます。時間の尺度が大幅に短くなり、さまざまな監視方法が求められていますが、いずれもリアルタイムで結果を出す必要があることは変わりません。

特化された多数のクラウドサービスであろうとハイブリッド環境であろうと、そもそもクラウドというものは多種多様で相互のまとまりがないため、潜在的なメリットをもれなく得るには膨大な開発と保守を要します。

複雑さに対処してクラウドへの移行から価値を得るために、組織には次のようなプラットフォームが必要です。

- クラウド導入のどの段階においても組織に役立つ
- ソースと時間尺度を問わずあらゆる種類のデータを収集する
- 組織の拡大に応じて拡張できる
- 組織内の全員にデータを行動へと変える力を与える



クラウド戦略のためのデータ戦略

クラウドに起因する問題は移行時にのみ現れるものではありません。クラウド導入の段階ごとに新たな複雑さが生じます。ただし、適切なツールセットがあればスムーズに段階を移ることができ、クラウドに期待されるメリットを実現できます。

組織は管理体制を犠牲にすることなく、ビジネス要件を満たすためにクラウドが提供すべきすべての能力を活用できます。チームは喜ばれるカスタマーエクスペリエンスを作成しコストを最適化しながら安定性と可視性を維持できます。

SplunkはData-to-Everything™プラットフォームです。クラウド導入によるメリットの実現に役立つよう設計されています。Splunkは構造、ソース、時間尺度に関係なくデータを取り込んで分析できるので、組織は適切な対応を実施できます。Splunkはクラウドの導入過程にある組織に役立ちます。組織はオンプレミスとクラウドのインフラからクラウドネイティブのアプリやサービスにいたるまで、効果的にデータの流れを管理および保護できます。その結果は革新的です。

費用対効果を実現する

Splunkを使えば、組織はリアルタイムで支出を監視し、コストを予測して非効率性を特定できます。確信を持って運用コストにシフトでき、初期費用が抑えられ需要の弾力性が増します。クラウドによる明らかなメリットを実際に活用できます。プロビジョニングの管理が限られ、コストの上昇につながる非効率なコードや孤立したリソースの使用が可視化されていない中、チームが手探りで業務にあたるということがなくなります。

可視性と制御を保つ

クラウドベンダーは可視性と管理のための独自のツールを提供することで、組織の運営を促進しようとしています。Data-to-Everythingプラットフォームでは単一の画面ですべての状況を正確に把握できます。さまざまな監視ツールに資産やサービスが分散するとリスクになることがありますが、こうした資産やサービスも管理できます。また、増加した攻撃対象を把握し可視化することができるので、ツールセットやプロセスの違いに関係なくメリットを実現できます。

データの活用を始める

適切なデータプラットフォームは組織内のすべてのデータの明確な全体像を提供するだけでなく、技術システムとビジネスシステムの架け橋となって最善の結果を導きます。もうオペレーションセンターと役員室を分ける必要はありません。Splunkのお客様はデータの生成速度が飛躍的に上昇することへの準備ができています。データを使ってコストを最適化し、データを通じて投資の意思決定を示すことで、並外れた顧客満足を実現しています。データの価値を最大活用しているのです。



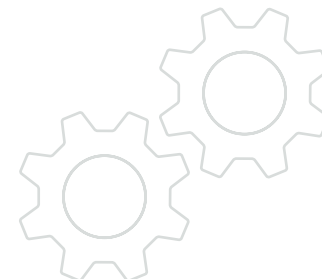
監視から可観測性へ

クラウドの複雑さに関する重要な要素として見逃してはならないのが監視です。従来のソリューションでは、調整、更新、パッチ適用によってシームレスにクラウドの需要に対応してきました。こうしたソリューションを使っているのは、問題を先送りするのがやっとなりで、最終的には自滅します。従来のソリューションはクラウド向けに設計されていないだけでなく、その多くは自身に備わる盲点に無自覚です。クラウドに基づく変革によって生じる膨大な量のサービス、アプリケーション、インフラの変更を監視し管理するために欠かせない全体像が把握できていません。従来の監視ツールは高リスクであることがわかっているもの、つまり、よりシンプルな環境で“知られていると知られているもの”だけを対象にしています。

1つのアプリケーションの内部では、何千にもおよぶマイクロサービスとサーバーレス機能が緩やかに結合していて、これらが複数のオンプレミス環境とクラウド環境にまたがっていることもあります。組織は量や種類、速度に関係なく、すべてのデータを収集してすばやく分析しなければなりません。従来の監視方法では不十分です。チームに“可観測性”が必要とされるのは、メトリクス、トレース、ログを分析して、問題の発生したタイミング、場所、理由を見つけ出すことができるからです。

可観測性という新しい能力があってこそ、“知られていると知られているもの”だけに基づいて行動するのではなく、発生の可能性すら認識されていなかった問題である“知らないことを知らないこと”も視野に入れて行動できます。これは可観測性の背後にある基本的な考えかたです。また、組織が自身のレガシーサービスだけを監視するのではなく、可観測性戦略に投資してデジタルトランスフォーメーションを促進しなければならない理由でもあります。

従来の監視方法では不十分です。チームに“可観測性”が必要とされるのは、メトリクス、トレース、ログを分析して、問題の発生したタイミング、場所、理由を見つけ出すことができるからです。



適切なデータプラットフォームが データ戦略を促進

Data-to-EverythingプラットフォームであるSplunkは多種多様なインフラとアプリケーションをサポートしています。インフラやアプリケーションがホストされている場所に関係ありません。このため、セキュリティ、IT運用、およびDevOpsチームは各自のすべてのデータを調査、監視、分析して、データに基づいて行動できます。ユースケースは枚挙に暇がありません。たとえば、組織はSplunkを使って事業継続性を維持しています。各自のシステムにわたって要求の急増を管理し、技術的な問題とセキュリティの脅威が発生するとこれらを検出して修復するのです。セキュリティチームとITチームはSplunkの職場およびリモート環境用ソリューションを活用して、絶えず変化する世界的な環境で安全性と生産性を確保しています。DevOpsチームは変革を大幅に加速させ、一貫したカスタマーエクスペリエンスを保っています。さらに、組織はデータをチームで広く利用できるようにして、人材を呼び込んだり維持したりしています。

イギリスの国民保健サービスからアメリカ合衆国国勢調査局にいたるまで、組織はSplunkを活用してデータをクラウド戦略に組み入れ、最終的にはクラウドに基づくビジネス変革に期待されるメリットを実現しようとしています。

ご自身の組織はどうでしょうか。クラウド導入による複雑さに対処する準備はできていますか。クラウド戦略に向けたデータ戦略はどのようなものですか。この戦略を遂行するためのデータプラットフォームは用意できていますか。ビジネス変革という目的の達成にクラウドデータ戦略はどのように役立つでしょうか。

クラウド導入のどの段階であっても、Splunkはこれらの問いのヒントとなります。Splunk Cloud™で効果的にクラウドを採り入れる方法をぜひご体験ください。データを活用して運用の複雑さを解決し、エンドツーエンドの可視化を実現して、データジャーニーとモダナイゼーションの取り組みにおけるセキュリティを保護しましょう。

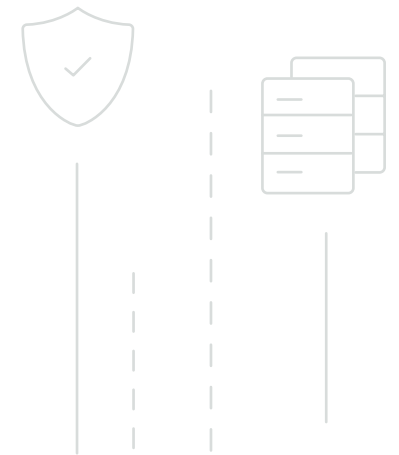




始めましょう

クラウド戦略に向けたデータ戦略の策定をSplunk Cloudで。

[詳細はこちら](#)



© 2020 Splunk Inc. 無断複写・転載を禁じます。Splunk, Splunk>, Data-to-Everything, D2EおよびTurn Data Into Doingは、米国およびその他の国におけるSplunk Inc.の商標または登録商標です。他のすべてのブランド名、製品名、もしくは商標は、それぞれの所有者に帰属します。

20-13719-SPLK-Why your cloud strategy needs a data strategy-EB-JA-202009

splunk>
turn data into doing™